

柞乃杜

秩父神社社報
柞乃杜(ははそのもり)

第 56 号
(大祭)

平成29年12月3日



終の住処と

決め移りたる

わが秩父

産まれ母の

祭の
郷ぞ

「秩父流鎔馬」奉納の復活

秩父神社御鎮座二千百年を奉祝する記念行事の白眉として
実に七百八十年振りに本格的な「流鎔馬」の演武を奉納することになります。

「秩父夜祭」の神幸祭神事がお山祭場に盛大な山車と花火との競演の最中で
三日深更に及び、その余韻の冷めやらぬ四日の午後、同じ祭場で華麗に執行されます。

かつて鎌倉・室町の時代に関東武士の信心を集めた「秩父大宮妙見宮」には、
神事の折ごとに秩父平氏一門の武將たちが勇壮な弓馬の業を競ったものでした。

近ごろのアスリートたちが、しきりに名乗る「侍ジャパン」の遙かな源流を成す
中世騎馬軍団の由緒正しい神事奉納の流鎔馬を、古式ゆかしく現代に継承すべく
真摯に活動しておられる森顯氏主宰の「倭式騎馬会」に深甚の敬意を表します。

解説 秩父神社 (55)

甲田 豊 治

◆「旧暦の妙見祭り (蔭祭り)」後編

この秋、大阪・あべのハルカス美術館にて大英博物館国際共同プロジェクト「北斎―富士を超えて―」、東京・国立西洋美術館にて「北斎とジャポニズム―HOKUSAIが西洋に与えた衝撃―」が開催された。

この葛飾北斎が活躍した時代(宝暦から嘉永は、二度改暦が行われ宝暦(一七五五)〜寛政暦(一七九八)と天保暦(一八四四)へと天文観測や西洋天文学の導入などにより暦法に変化をもたらした時代と同時に、秩父市中村町に伝わる「祭礼日記」(文政十年(一八二七)〜嘉永三年(一八五〇))が記された時とも重なりを見せる。

その時代の「天文台」に関する浮世絵版画を北斎は残している。「富嶽百景」初編に納められている「鳥越の不二」である。当時、浅草片町裏にあった天文台(天明二年〜幕末まで存在を富士と重ねて描いた有名な作品である。



葛飾北斎・鳥越の不二

又、もう一点ここに掲載する梅堂國政筆による「開化名景競 九段坂」と題する作品は、明治四年の東京招魂社(現靖國神社)の正面に建設された「高灯笼」の風景で、当時この九段坂上周辺は遠く筑波山や房州まで見渡せたと言われている。その二年前の明治二年まで、実は九段坂にも天文台が存



九段坂「高灯笼」

在していたのであった。天保十三年(一八四二)最後の太陰太陽暦である「天保暦」を完成させた渋川景佑等の尽力により設置されていたのである。当時の江戸には二ヶ所の天文台が設けられており、近世日本における天文観測への関心を窺い知る事が出来る。皆さんも浅草・九段の散策の際は、天文台址など、「高灯笼」は現存している。訪れてみては如何だろうか。

さて、中村町に伝わる貴重な史料「祭礼日記」に見える妙見祭りを述べてみたいと思う。

文政十年(一八二七)からの記録が伝えられているが、ここで注目するのが天保三年(一八三三)の記録である。この年は、妙見宮に対して藩主松平下総守より、葵御紋の幕・大提灯・高張提灯の下賜があったなどの記録も見え

るが、ここでは「閏霜月蔭祭」の記載を解説する。

天保三年壬辰年閏霜月蔭祭仕度由(六組一同)

妙見宮社内江集合致し相談之上左之通り願書差上候

乍恐以書付奉願上候

大宮郷妙見宮祭礼之儀者古来より閏月有之候節者蔭祭

祭神事有之去ル文化十年酉年閏霜月郷中六ヶ所より

少々宛て造物差出し候所參詣之者商人も諸方より

数多入来郷中一同之潤三相成候二付先例之通り當閏霜月

蔭祭り少々之造物差出し申度願上候尤喧嘩口論者勿論

右造物之儀も極質素ニ仕諸入用多分不相掛様

可仕候此段被 仰上何卒御憐愍を以奉願上候通り

御聞濟被成下置候ハズ一同難有仕合ニ奉存候已上

天保三辰年閏霜月 六組行事

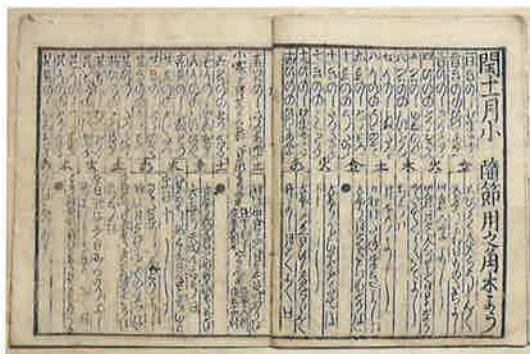
右記の内容により、霜月が閏年によって二回続く年は、屋台町の六ヶ町が閏霜月の妙見市を「蔭まつり」とし齋行した文化十年(一八三三)の例を挙げ、願書を提出した記録を伝えている。しかし、この申し出は叶わなかったが、境内に本町屋台を飾り置きし、そこで「代々神楽」を披露したことが伝えられている。

実は、この例祭が閏霜月となることは、大変稀なことなのである。

それは、渋川春海の「貞享暦」以降明治六年のグレゴリオ暦(新暦)に改暦される一九八年間のなかで

貞享暦(元文二年…《二七三七》) 宝暦暦(宝暦六年…《二七五六》) 寛政暦(寛政六年…《二七九四》) 文化十年…《二八一三》) (天保三年…《二八三三》)

の計五回閏霜月が存在したのみである。そのうち、文化十年と天保三年の記録が残されたことはまさに奇跡的である。



文化10年の暦「閏霜月」

近世の秩父妙見神事を知る上で「祭礼日記」は、文化財的価値を有し、旧暦時代の妙見祭礼を今に伝える貴重な財産である。改めて、百九十年前の資料を公開していただいた中村町の方々に感謝申し上げます。

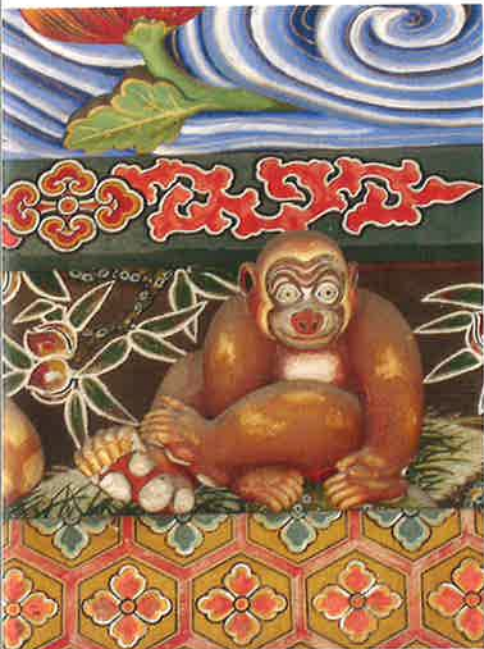
鎮守の森コミュニティの春を目指して

宮司 蘭 田 稔

本年の弊社例大祭は、昨年の大祭初日に「秩父祭」がユネスコの世界無形文化遺産に認証されて二年目の大祭に当たります。

昨年度ユネスコのアジスアベバ総会において、秩父夜祭を含む三十三件の国指定無形民俗文化財「山・鉾・屋台行事」が一括して世界レベルの文化遺産に認証されたとの吉報が、しかも弊社例大祭初日の昨年十二月一日未明に飛び込んだことは、前日深夜から秩父まつり会館に待機した久喜市長をはじめ地元祭関係者各位が揃って喜びを爆発させた光景と共に記憶に新しいところですが、小職としては、その慶事を実現すべく全国曳山祭保存連合会を率先して尽力して来られた地元文化財関係者の労苦を多とすると共に、その吉報が他の曳山祭に先駆け、真つ先に弊社の大祭初日にもたらされたことに、何かしら弊社御祭神の深いご深慮を賜わったかと有難く拝した次第でした。

更に申し添えるならば、弊社は去る平成二十六年度にめでたく御鎮座二千年年の佳節を迎え、当年の例大祭を百年に一度の式年大祭として、畏くもご皇室より臨時の御奉幣を賜わるなど盛大な祭典を執行し、以来その奉祝記念事業を継続しておるところですが、このことに関連しては、一昨年より奉祝事業奉賛会を結成して地元氏子崇敬者をはじめ広く関係諸団体法人からの尊いご浄財を拝領しての本格的な関連諸施設の整備に取り組んでおるところでもあります。



「お元気三猿」

お蔭さまで、その眼目の一つである例大祭のいわゆる「夜祭」神幸祭の御旅所「お山齋場」の本格的整備がほぼ完了して、それこそ有史以前よりの神体山である武甲山とその里宮に当たる弊社との象徴的結節点である祭場が、面目一新して二百年ぶりに復元されたことになりました。おそらくはこの神域整備によって、秩父盆地の伝統的な生活風土が武甲山に代表される山並みの恵みに浴してこそ営まれてきた、その敬虔な祈りと感謝を土地神に捧げるための祭場であることを、地元住民の皆さんばかりか観光で訪れる人々にも納得して頂けるものと自負しております。

もう一つの奉祝事業の眼目は、いうまでもなく弊社ご社殿を主とする境内整備ですが、既にご神門内の上境内については、摂末社に当たる老朽小社のうち本殿両側の伊勢両宮の分社、神明社と豊受社を先年に式年遷宮の古材を拝領して再建し、東照宮の社殿を修復し、宮側町奉斎の柞稲荷社も改装するなど追って整備を進めるなかで、先年来、境内東側に武甲山の伏流水とみなす豊かな地下水を汲み上げての流水をしつらえ、これを「柞の禊川」と銘打ち、参拝者の「水占」の場に供するなど工夫を凝らして境内を潤いのある安らぎの聖域となるよう心掛けております。

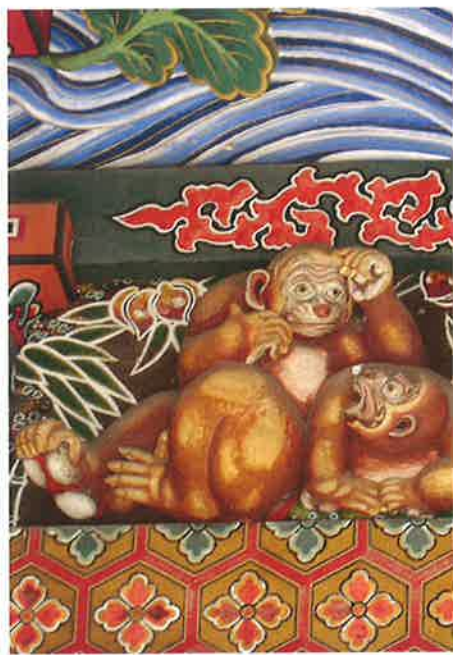
さて肝心の本殿改修につきましては、埼玉県指定文化財であるために、県当局派遣の専門調査官と建築史専門家をも加えた御社殿改修委員会を結成して今後の改修内容および工程を検討しているところですが、県当局の予算処置が平成三十年以降にずれ込むとのことで、当面は来年度をもって改修をめざした事前の予備調査期間とし、県予算の決定を期する再来年度から改修工事に掛かることとなります。

かねてお伝えしていますように、弊社の中核をなすご本殿は、中世以来の関東に名立

たる「秩父大宮妙見宮」を近世初頭に体現した、まことに魅力的なご社殿であります。

弊社が大切に所蔵します『妙見御社御棟牘』という名の大きな棟札に詳しく記載してあるように、天正二十(一五九二)年九月と記す内容には、「大旦那東関国主正二位源朝臣家康」と墨書され、家康公が將軍として江戸に開幕する慶長八(一六〇八)年に先立つ十六年も以前に自ら弊社の社殿を再建した証ですが、当時は現在のご社殿のみでその後、初期権現造りの幣殿と拝殿及び彫刻類の完成には、どうやら天和三(一六八三)年と実に九十一年をかけて現社殿となったようです。

とりわけ年月を掛けて社殿を飾る彫刻類は、おそらく三代將軍家光公が家康公の靈廟である日光東照宮を大規模に改修して現在の豪華な彫刻



本殿西側彫刻

本殿裏の北面には野鳥群の中央に妙見神の神座である北極星を望む「見返りの鼻」を配置するなど、すべて弊社ならではの由緒を物語る傑作を遺しているのです。

まことに残念ながら、こうした傑作を遺した名人の姓名が、当時職人気質の矜持からか何処にも記されていませんが、ともかく本事業で大切に補修する所存であります。



【表紙絵解説】

今回の表紙絵画は、市内熊木町にお住いの浅見嘉正様の作品、第七十七回一水会展(九月十八日〜十月三日)上野の東京都美術館において出展されました「柞乃杜」を掲載いたしました。

秩父神社表参道通りの正面から描いたこの作品は新緑の中に見える神門の朱色と街灯、鳥居が大

変印象に残る作品です。

浅見様はこの作品についてお聞きしたところ「前に一度描きましたが、たいへん良い構図ですので、再び描きたいと思ったところです。神苑の写生では常に身が引き締まり気持ちも清々しくなるのを感じます。」と感想を頂きました。

浅見様は創作活動以外にも一水会運営委員、日展会員の傍ら当社「ははそのもり美術展」の代表として日々御活動されています。

今後、益々のご活躍をお祈り申し上げます。



【表紙歌解説】

終の位処と 決め移りたる わが秩父
産まれし母の 祭の郷ぞ

今回の短歌は響短歌会主宰・埼玉県歌人會理事・現代歌人協会会員の綾部光芳様の作品を掲載させて頂きました。

綾部様はこの歌について「母は上の台に生まれ、大宮小学校を卒業後、実科高等女学校に通う頃に上野町に引越したようです。その後、飯能の大森商店に勤めていた父と結婚。四人の子を儲け飯能で暮らしておりました。現在は父母も妻も亡くなり、妹夫婦の住む野坂町に越してまいりました。一年中毎日どこかで祭りを行っている程、祭の郷と言つべきこの秩父で生を終えることになりましたが、それも巡り合わせだと詠みました。」と晴れやかに語って頂きました。

今後、益々のご活躍をお祈り申し上げます。

※今回の歌題字は、秩父市中町在住の女流書家、根岸可黎様に書いて戴きました。

氏子青年会報告

◆ 武島利夫氏

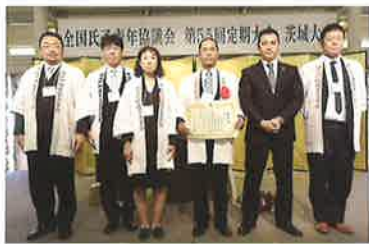
優秀氏子青年表彰受賞



八月五日、全国氏子青年協議会第五十五回定期大会が、茨城県神栖市のアトンプレスホテルに於いて『和を深め、輪を繋ぎ、

我が郷土を愛す』を主題に、茨城県氏子青年協議会主管の下開催されました。全国から約五百名の仲間が参集し、その席上にて当社氏子青年会第五代会長武島利夫氏が「優秀氏子青年」の表彰を受けられました。

武島氏は、結成当初から当会の幾多の事業に携わり、平成十四年の会長時には「ははその杜フェスティバル」を企画し、境内は大勢の氏子やその家族で賑わい、新風を吹き込みました。その功績が高く評価されたの受賞は当会にとつても名誉あるものでした。



◆ 「東国三社」参拝・研修旅行

氏子青年会副事業部長 長谷川 武史



天候に恵まれた八月五日・六日、蘭田権宮司をはじめ、井深会長他総勢二十一名で、全国氏子青年協議会第五十五回定期大会茨城大会

及び「東国三社」として信仰の篤い鹿島神宮、香取神宮、息栖神社参拝の研修旅行に参加させて頂きました。

鹿島神宮、息栖神社は、限られた時間での参拝でしたが、ともに由緒ある御社で、鹿島神宮は本殿・拝殿・楼門など社殿七棟が国の重要文化財に指定されており、特に楼門は高さが約十三メートルもありその大きさに感動致しました。

続いて、香取神宮（本殿・楼門は国の重要文化財）で正式参拝を行いました。香取宮司様、職員の方に御由緒の説明を伺い、宝物館等を拝観、心温まるおもてなしを頂きました。

この三社は地図上で結ぶと二等辺三角形が描かれ、不思議なことが起きるとか起きないとか。昔からこの三社と一緒に巡ると縁起がよく「東国三社参り」という風

習があるとの事です。

その後、宿泊地である千葉県犬吠崎の宿へと向かいました。

天然温泉に浸り一日の疲れを取り、豊かな海の幸と御神酒での直会となりました。宴中、武島令夫人の誕生日を祝うサプライズが行なわれたり、この度表彰を受けた第五代武島会長と有志による「秩父屋台囃子」の披露で会場は大いに盛り上がり、一瞬にして夜祭ムード、参加者一同より一層懇親が深められました。

翌日は、銚子半島の最東端の岬にそそり立つ犬吠崎灯台を眺望し、屏風ヶ浦を後にしました。

次に向かった日本初の航空科学博物館では、航空機の模型や実機の展示を見学、展望台からは間近に見る成田空港を離着陸する大型機は迫力ある姿で感動的なものでした。



今回無事に、また大変有意義な研修旅行に参加することができ、心より御礼申し上げます。

◆ 三峯神社登拝と「禊」研修

氏子青年会副事業部長 坂本 孝夫
晴天の九月三日（日）、第二回目となる三峯神社登拝と禊研修を、蘭田権



境内は大変混雑しておりましたが、拝殿は凜とした気に包まれており、参加者一同清々しい思いで参拝させて頂きました。

朝日権禰宜様を始め、三峯神社の皆様には大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。皆様も機会がありましたら、ぜひ体験して下さい。

宮司をはじめ、伏見権禰宜、当会第九代会長の山本顧問及び高校生にも参加を頂き、井深会長以下総勢十六名で行いました。

三峯神社朝日権禰宜様に道彦をお勤め頂き、大輪より三十分ほど山道を登った禊祓場「清浄の滝」へと向かいました。

各自白鉢巻、白禪となり、滝の傍らの清浄宮にお参りした後、道彦のご指導の下、大きな掛声を掛けたり、和歌を歌いながら、船を漕ぐような仕草を繰り返します。その後約二十分程かけて様々な所作を繰り返した後、「エイッ」と手刀を切り「祓戸大神」と唱えながら滝へと入水いたしました。痺れる程冷たい水に肩まで浸かり、大声で祓詞を五度唱えた後、各々滝に打たれ、無事禊を終りました。



◆ 奉賛者御芳名簿(5)

平成二十九年七月〜十月迄

神社扱い 十五万円 秩父神社氏子青年会 会長 井深 昭

◆ 雷神守

予てより「つなぎの籠」を始めとする彫刻の御守りを奉製して参りましたが、新たな彫刻守として「雷神守」を奉製致しました。

当社にはご本殿東側の幣殿中心より良(丑寅)の方角に見える雷神の彫刻があります。

徳川家康公により再建され、約四百年このカミナリ様が鬼門を守り災いを除くと伝えられてきました。



諸難消 除・技芸 上達を祈 願し社頭 にてお頒 ち致しま す。

◆ 特別御朱印授与

此の度例大祭期間中(十二月一日〜六日)に限り、特別御朱印を授与致します。

秩父夜祭が妙見祭礼とも呼ばれた



ご由緒に因みご祭神の天御中主様(妙見様)のお姿を特別紙で奉製を致しました。

数に限りがありますので、お一人様一枚に限らせて頂きます。

◆ 神前舞「柞乃舞」

平成二十六年の御鎮座二千年を奉祝して作られた柞乃舞も今年で四年目を迎えます。

本年の舞姫は左記の四名が御神前にご奉仕します。

- 園田さくら 園田わかな 中島利々夏 高橋音寧



◆ 神賑行事

「秩父流鎗馬」開催

例大祭神賑行事として、来る十二月四日に「秩父流鎗馬」を開催します。三年前の二千年奉祝行事以来、多くの皆さまよりご要望の声を頂いておりましたが、此度、倭式騎馬會の皆様を始め、関係各位のご尽力により開催の運びとなりました。色鮮やかな騎馬衣装に身を包んだ五人の射手を始め騎馬隊等により賑やかに奉納演武致します。



行事後 当りの授与や体験乗馬会を流鎗馬を奉納した馬場で行う予定となっております。

日時 平成二十九年十二月四日(月) (雨天決行) 午後二時 秩父神社奉納奉告祭 午後二時 秩父流鎗馬神事 場所 秩父神社 秩父公園お旅所斎場前

◆ 秩父神社妙見講

- 自 平成二十九年 九月 至 平成二十九年十一月
- 九月 二日 荒川妙見講
- 浅海 忠講元外百一名
- 九月 三日 小鹿野講
- 松本 守講元外七十一名
- 九月 十一日 上町講
- 島崎弥平講元外百八十八名
- 十月 一日 上宮地講
- 大島耕造講元外百六十五名
- 十月 一日 中村講
- 高橋徳太郎講元外二百四十五名
- 十月 二十一日 東町妙見講
- 三友直彦講元外八十八名
- 十月 二十二日 中町講
- 久保忠太郎講元外百十四名

- 十月二十八日 桜木講
- 濱田雄司講元外四十七名
- 十一月十四日 番場妙見講
- 江原伸治講元外九十七名
- 十一月十七日 野坂講
- 浅見伊久雄講元外百五十一名

◆ 柞乃杜神前結婚式報告

- 秩父市大野原 佐藤彰洋・美紀様
- 新座市新堀 石井健史郎・千春様
- 大里郡寄居町 大内克彦・千絵里様
- 秩父市上影森 齊藤 竣・成美様
- 横瀬町横瀬 岸 武弘・ゆかり様
- 深谷市岡 足立侑翼・有希様
- 秩父市阿保町 宮前直人・仁美様
- 秩父市中宮地町 小林俊介・奈緒美様
- 茨城県東茨城郡 大塚 颯・史織様
- 秩父市道生町 新井大和・叶恵様
- 秩父市日野田町 原 章郎・祐子様
- 群馬県桐生市 石田拓也・優貴様
- 横瀬町横瀬 町田 滉・のりか様
- 静岡県御殿場市 新井慎也・由佳様
- 小鹿野町三山 黒沢一成・冬美様
- 未永く幸せな家庭をお築き戴きますようお願い致します。

◆ 職員辞令

巫女 中川緋奈香 願いにより職を免す (七月三十一日付) 白井麻弓 巫女見習いを命ず (八月一日付)

◆ 秩父神社付属神楽 後継者養成のお願い



秩父神社代神楽は遡ると江戸時代・寛永年間(一六二四〜一六二八)に伝えられ、昭和五十年十月には国指定無形文化財の選定を受け、一昨年「秩父夜祭りの屋台行事と神楽」を含む「山・鉾・屋台行事」がユネスコ無形文化遺産に登録されました。

古典神話で構成された演目は三五座で黙劇の演劇的な表現の多いのが特徴です。
十二月三日の例大祭を中心に各祭事に奉納し、海外



公演や大宮の武蔵一宮氷川神社など県内外でも奉納演奏をしています。

現在主任を始め十三名で行っていますが高齢化が著しく、今後の継承が難しい時代を迎えようとしています。

私共と神楽を継承して頂ける方、興味のある方は左記日時にて練習会を行っていますので、ご連絡をお待ちしております。

記

一、日時 毎月第二水曜日
午後六時〜八時

一、場所 秩父神社神楽殿

一、担当 守屋権禰宣

◆ 今後の神楽奉納予定

平成三十年

一月二日(火) 午前九時〜四時

二月三日(土) 午前九時〜四時

四月四日(水) 午前九時〜四時

会場 秩父神社神楽殿

◆ 第三回 さいたま絹文化 フォーラム開催について

平成三十年三月十八日(日)、横瀬町町民会館を会場に、埼玉大学教授田村均先生と、埼玉県産業研究センター・国の伝統工芸品指定担当者であり、秩父市報掲載「秩父銘仙こぼ

れ話」の執筆者である影山和則先生の講演をはじめ、銘仙に関する催しを企画しております。

又、隣接する横瀬町歴史民俗資料館において「横瀬織物展」(収蔵品展)を開催しており、貴重な収蔵品をご覧いただけますので是非ご参加下さい。

問い合わせ先

さいたま絹文化研究会事務局

(川越・氷川神社)

電話〇四九一二二四一〇五八九

◆ 新人紹介

巫女見習 白井麻弓



昭和62年9月28日生。秩父市中村町出身。八月より巫女見習いとして奉職させて頂く事になりました。

私は秩父神社で命名させて頂き、お宮参りから成人式など、節目で数多くお世話になりました。以前お正月にご奉仕させて頂いた事があり、今回ご縁がありまして格式高く伝統のある秩父神社でご奉仕させて頂ける事は大変有難く思っております。まだまだ不慣れですが諸先輩のご指導のもと、早く覚え学んで行きたいと思っております。参拝に来られた方々に気持ちよく参拝して頂けるような対応が出来るように頑張りたいと思いますので、どうぞ宜しくお願い致します。

編集後記

■山々からの息吹も日毎に寒さを増し、柞の杜も冬支度を迎え愈々例大祭を迎えます。ここに社報第五十六号大祭号をお届けいたします。

■近年、ご朱印ガールなる呼び名が生まれるなど、ご朱印を受ける方が老若男女を問わず増加しております。ご朱印の歴史は古く神仏習合の時代、納経を社寺に奉納した証が起源とされ現在の様式は明治時代以降に普及してゆきました。集印の楽しみが神社との距離を縮める切っ掛けとなり、神社の由緒、地域の歴史を学んで頂けるものと切に望みます。

■今号を持ちまして、前権禰宣甲田豊治氏の神社解説は終了となりました。お忙しい中二号に渡り、玉稿を賜り厚く御礼を申し上げます。次号よりは新たなテーマのもとに氏子・崇敬者をはじめ参拝の方々にお届けできればと思っております。



※ 本報の用紙は再生マツト紙を使用しています。

平成二十九年(二〇一七)十二月三日

編集 秩父神社社務所

〒366-0004 埼玉県秩父市番場町一三

TEL 〇四九四二二一〇二六二

FAX 〇四九四二四一五五九六

印刷所 有限会社 拓文社印刷所
〒366-0004 秩父市東町二七一八